

なぎなたの国際発展とジェンダー・イメージの変容

ベレック・クロエ

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 薙刀とは、本来長い柄の先に反り返った長い刃をつけた武器であるが、一般的には「なぎなた」が女子の活動としてとらえられており、学校のクラブ活動として発展している。日本全国で盛んに行われているが、国際的には 1990 年に国際なぎなた連盟が発足し、現在は 14 カ国が加盟している。

なぎなたは女子向けの武道として長い歴史を持っているため、日本においては女子のものとして認められており、なぎなたには女性的なイメージが存在している。そして 1960 年代と 1970 年代にアメリカ・台湾・ヨーロッパにおいてなぎなたの稽古を始めたのも女性だった。ただ、海外ではなぎなたが、僧兵と武士が戦場で用いた武器としてのイメージを通じて普及したため、やがて男性に人気が高まり、1990 年代以降、なぎなたの愛好者は男性のほうが多くなっている。全日本なぎなた連盟はこの現象に対して、反対を表明しておらず、男性のなぎなたを日本の伝統文化の活動として認め、日本人男性にもなぎなたを奨励するようになっている。本稿は、なぎなたの国際発展を通して、なぎなたのジェンダー・イメージがどのように変化したのか明らかにした。

はじめに

薙刀とは、本来長い柄の先に反り返った長い刃をつけた武器である。歴史を振り返ってみれば、薙刀は、平安後期の後三年の役（1083 年から 1087 年）のころから室町中期まで、僧兵と武士によって用いられた主流武器の一つであった。薙刀は古流派の稽古を通じて教えられ、稽古で使用する木製の薙刀や術はそれぞれの流派によって様々である。

薙刀は伝統的な活動として、昭和戦前期を通して学校の女子体育として発展し、1943 年には高等女学校の必修科目にまでなった¹⁾。第二次世界大戦後、薙刀の教育はしばらく禁止されたが、1955 年 5 月に全日本なぎなた連盟が結成され、それまでの「薙刀」は「なぎなた」と改められた²⁾。そして学校で稽古を行いやすいように、各古流の薙刀術が統一され、なぎなたは学校のクラ

ブ活動として発展した³⁾。試合で戦うために、より軽い檜の柄と竹の刃で出来た武器が用いられるようになった⁴⁾。

なぎなたの国際的な発展は 1960 年代に始まり、アメリカやヨーロッパ各国になぎなた連盟が発足した。そして 1990 年には国際なぎなた連盟が成立し、現在は 14 カ国がここに加盟している⁵⁾。なぎなたは女性のための武道として日本から輸出されたが、海外では数多くの男性がなぎなたの稽古をしており、このことが海外におけるなぎなたの特徴として挙げられる。

何故、海外でなぎなたは主に男性に人気があるのか。結論を先取りしていえば、それは、なぎなたが女子武道としてだけ認識されているのではなく、武士の武器のイメージを通じて、男性的であると海外では見られているからである。つまり、海外と日本におけるなぎなたのイメージは同じではないということである。なぎなたには、二つの

ジェンダー的なイメージ、すなわち、日本古代の武士の武器としての男性的なイメージと、近世の武士の娘や近代の女子教育に導入された女子向けの武道の女性的なイメージが存在していることになる。

本論文では、このようななぎなたの二重のイメージを明らかにしていきたいと思う。まず、日本と海外におけるなぎなたの多様なジェンダーをめぐるイメージを分析し、その上でこれらのイメージがなぎなたの普及にどの程度、影響を及ぼしたのかを明らかにしたい。またこうした現象に対して全日本なぎなた連盟は、どのような態度で対応したのだろうか。そして結果的に、全日本なぎなた連盟は日本人男性になぎなたを奨励することを決めたが、それはどのような理由によるのだろうか。本論文では、これらのことを考察していくことにしたい。

武道、特に柔道の国際的な発展に関する研究は多数見つけられる。しかしながら、なぎなたという武器と武道は世界において基本的に知られておらず、さらに海外でのなぎなたの普及は局所的な現象であるため、まだこの課題に関する研究が行われていないのが現状である。また、なぎなたの国際化は現代的な現象のため、先行研究は全くない。したがって本論文は、これまでの研究状況からみて先駆的な研究であるといえるだろう。

本論文では史料として、全日本なぎなた連盟が創立記念日ごとに発行した連盟の歴史を伝える本や大会のプログラム、世界なぎなた選手権大会やヨーロッパなぎなた選手権大会のプログラム、フランスなぎなた連盟とベルギーなぎなた連盟の史料を用いることにしたい。

1 女性武道としてのなぎなた

1-1 女性武道になった経緯

薙刀は戦場の武器として現れ、9世紀から15世紀にかけて武士・侍・僧兵に用いられた。そして、同じ時代の巴御前と板額御前という有名な女性武士が、薙刀を武器として用いているところを描いている絵が存在している。この二人は、源平合戦(1180-1185)で薙刀を武器に用いて戦った

としばしば言われているが、平家物語などの歴史的な史料からは確認できない。また、これらの絵は江戸時代に描かれたものであり、そこに描かれていることが真実かどうかは定かではない⁶⁾。しかし一般的なイメージでは、中世の女性武士と薙刀が結びついている。16世紀から鉄砲や槍の出現によって、薙刀は次第に戦場から消えたが、江戸時代になると武士の女性の持参財産や飾り、武士身分の女子むけの教育道具として出現し、女性用の武術として女性に薙刀の稽古が行われ始めた⁷⁾。

20世紀初頭に、高等女学校制度の設立と同時に、薙刀の稽古は日本の体育として徐々に学校に導入された⁸⁾。この時代に、女性向けの武道という特徴が確立したといえるかもしれない。1936年には、女子師範学校、高等女学校に薙刀が正課(随意科)として認められ⁹⁾、また1943年から女子師範学校、高等女学校、女子実業学校の生徒の正課必修になった¹⁰⁾。古流派の宗家や古流派における稽古では男性が存在したが、学校で薙刀は女子だけに教えられた。

他のスポーツや体操でも女子の心身を育成することが出来るはずだが、1943年に必修とされたのは薙刀であった。この理由は、薙刀が日本の伝統的な武道であったからである。1930年代と1940年代に出版された薙刀の指導についての本の題名には、「薙刀道」という名称が頻繁に用いられた¹¹⁾。「薙刀道」は「武士道」を参考にした表現であり、薙刀と日本の歴史との繋がりを表わしている。1900年代に新渡戸稲造の『武士道』が世界的なベストセラーになったが、新渡戸は新しい言葉を創ったと思っていたのにもかかわらず、結果として「武士道」は国家主義の影響下で日本の伝統的な精神になった¹²⁾。そして戦時中の国家主義イデオロギーの影響下に、日本国民には武士の精神が生き続けているという観念が広がっていた¹³⁾。1944年に行われた「薙刀——要目の精神と其の指導」という座談会の中では、次のように「皇国女子」と武士の娘とのつながりが強調されている。

特にこうした戦争下に於いて母性の力が戦意

の高揚に、また第一線将兵の士気の振作に如何に大きな役割を示しつつあるかということは今更申上げるまでもありませんが、[…]皇国女子としてこの要目によって十分錬磨し日常生活に具現せしめ武士の妻や子女としての心構えを強くして行かねばならないと思います¹⁴⁾。

このように薙刀は武士や戦争と結びつけられていたがゆえに、第二次世界大戦後、占領政府は、第二次世界大戦中の日本社会の軍隊化に果たした武道の役割を考えて薙刀を含む武道がしばらく禁止された。文部省は、1945年11月6日付発体第80号による文部官牒「終戦に伴う体錬科教要目(綱)の取り扱に関する件」により、なぎなたを学校体育の教材から除外した¹⁵⁾。1951年にサンフランシスコ講和条約が締結され占領軍が解散された後、スポーツとして剣道に次いで、1955年5月に全日本なぎなた連盟が結成された。戦時中に教えられた各古流の薙刀術が統一され、軽い櫓の柄と竹の刃で出来た武器で競技も開催された。太刀対薙刀の組み合わせで行った古流の形の代わりに、新教材として、なぎなた対なぎなたで「しかけ応じ」という8本の攻撃と応じ技が作成された。薙刀の技術が現代の方式につくりかえられる準備段階であった1950年に、徳永千代子は「新しいなぎなた」概念について次のように述べている。

新しいなぎなたの特徴

なぎなたは初め主として武器として発達したが武器として価値をもてなくなった今日では、運動形式の比較的な簡単な対人競技であり、弾性のある柔軟性を要求する全身運動で武器を扱っての競技で興味があり非力的な女性にふさわしく、多く楽しまれるため、実用性を失ってからでも遊戯やスポーツとして一般女性にしたしまれている¹⁶⁾。

「弾性のある柔軟性を要求する全身運動で武器を扱っての競技で興味があり非力的な女性にふさわしく」というなぎなたは、柔道や剣道のように

体力に重きをおく男性向けの他の武道と異なる。この新しいなぎなたは、武器としての価値を有しておらず、さらに、女性の身体向けの体育の活動であることも強調されている。

全日本なぎなた連盟の創立後、1959年12月23日の文部省次官通達で、学校における「なぎなた」は、中等教育以上の学校にクラブ活動として復活する。この通達には、「したがって、この運動種目は、[…]主として、女子の特別教育活動(クラブ活動)または学校行事等において行われることが適当であると考える」¹⁷⁾と、なぎなたは女子の武道であることが述べられている。直心影流の十七代宗家の園部繁八は1981年に出版した『図解コーチなぎなた』の中で、以下のように述べ、女子の武道としてはなぎなたが最も適切であることを主張している。

最近女子のなかに、男子と同様に、剣道を学ぶもの、柔道を学ぶもの、弓道を学ぶもののあることはまことに喜ばしいことである。武道としては、いずれをとっても差異はないが、女子の武道としては、女子にふさわしい、生理的に危険が少なく、そして心理的にも適合したものを選ぶことが必要である。それにはなぎなたが最も適切である¹⁸⁾。

全日本なぎなた連盟の理事や国内大会の中心にいるのは女性である。1956年より開催された全日本なぎなた選手権大会は女性のみの大会であった。今日では、全日本なぎなた連盟に男性もいるが、登録している6万5千人のうちほとんどは女性である¹⁹⁾。『日本の武道——日本武道協会設立30周年記——』という2007年に日本武道館が発行している本において、全日本なぎなた連盟により作成された章の中では、なぎなたの稽古を通じて、女性の教育を行い、妻や母としての徳を培うと主張されている。

全日本剣道連盟の元常任理事で剣道範士の故・井上正孝先生は、なぎなたの絶大な理解者であり、多くのご教示をいただきました。「特に子どもの教育にとって、母の力ほど偉

大きなものではありません。[…] その母なる女子の教育・指導はぜひなぎなたの皆さんにお願いしたい」と常々お話しされていたことが忘れられません²⁰⁾。

なぎなたは女性向けの武道として長い歴史を持っており、全日本なぎなた連盟に登録している人口はもっぱら女性であるため、今日でも日本においては女子のものとして認められているのである。

1-2 海外における女性向けのなぎなたの普及

すでに述べたように、なぎなたは長らく女性向けの武道として認知されてきたため、1960年代と1970年代に、海外においてなぎなたが普及し始めた時、その対象者は当然女性であった。アメリカ・台湾・ヨーロッパでもなぎなたの稽古を始めたのは女性だった。徳永の自叙伝の中で、1960年代の半ばに台湾でなぎなたの普及に尽力した時に、なぎなたを台湾に女子向けの活動として輸出したことを、以下のように語っている。

謝先生と親しく交流する間に、先生はなぎなたも興味を持ってくださるようになりました。(…)女性が無理なく学べ、楽しめる武道として、その価値を高く評価してくださいました。「台湾でも、なぎなたを広めてはいかがですか」。謝先生の言葉は、日本の中でさえ普及に四苦八苦している私たちにとって、まさに僥倖ともいえる温かい言葉でした²¹⁾。

1970年代半ばになっても、台湾の淡江女子大学では、女性に中心してなぎなたの稽古が行われた。アメリカの場合は、1960年代末から1970年代初頭にかけてなぎなたの普及に際して、徳永はアメリカで女性になぎなたを指導することについて次のように述べている。

在米の日本女性になぎなたを指導するということは、私たちにとって願ってもないことでした。[…] それまでも、なぎなたの美しさを見て感動し、入門を希望してくる外国人女

性は少なからずありました²²⁾。

この「外国人女性は少なからずありました」という表現から、アメリカで日本人の移民や日系人の次になぎなたの稽古を始めたのはアメリカ人の女性であったことが推測される。欧米人によってなぎなたがもたらされた国でも、なぎなたの輸入に従事したのはやはり女性であった。イギリスのバトリシア・クヌッセンは1976年に²³⁾、そしてスウェーデンなぎなた連盟を創立したグニラ・ハンソンは1985年に、東京でなぎなたの基本を修得している²⁴⁾。

フランスの場合、正式になぎなたの普及を図ったのはシモーヌ・シャルトンだった²⁵⁾。しかし、実際にフランスへの輸入を望んだのはフランス剣道連盟の会長のクロード・アモであった。『創立四十周年記念誌——この10年のあゆみ——』において、クロード・アモとなぎなたとの出会いが以下のように述べられている。

1973年・第二回世界剣道大会がアメリカで開催された。[…]両会場に「なぎなた」は公開演技として、異種試合²⁶⁾と天道流薙刀²⁷⁾の形を公開し、更に各地で余暇を利用して、各国の参加選手を相手に「なぎなた」講習会を開催した。

それに参加された、フランス剣道連盟の会長クロード・アモ氏が大変好感をもたれて、早速翌年に最大のスケジュールで、日本各地の「なぎなた講習会」に参加され、この時同伴者として、シャルトン・シモーヌ（中学校体育教師）を連れて来られたが、やはり「なぎなた」は女性でなければとても難しいよと言われたことが印象的だった²⁸⁾。

リーダーとしてフランスへのなぎなたの輸入を望んだのはクロード・アモであったが、日本におけるなぎなたの講習会に参加して「やはり『なぎなた』は女性でなければとても難しいよと言われた」ので、代わりに同伴者であったシモーヌ・シャルトンがなぎなたの普及への尽力を任された。シモーヌ・シャルトンは、『フランスの黒帯

『(Les ceintures noires de France)』という雑誌の1985年の記事において、フランスにおけるなぎなた普及の歴史を描いている。シャルトン³⁹⁾は、「女性に普及したなぎなたという武道に男性も興味を持ち、男性が登録人口の10分の1を占めている」³⁹⁾と述べる。初めになぎなたが普及した時は、その対象者は女性が中心であり、フランスでは1980年代までは、なぎなたの稽古は、シモース・シャルトンの女弟子の間で行われたと思われる。

2 男性的ななぎなた

2-1 海外における男性愛好者の登場と増加

しかしながら海外では1990年代から、男性がなぎなたを中心的に担うようになっていく。海外においてなぎなたの稽古に参加した男性に関する史料は大変少ないため、いつごろから男性がなぎなたをするようになったのかははっきりわからないが、大会のプログラムと結果をみると、男性の競技人数が増加した時期を推測することができる。

海外の大会に出場する選手に着目すると、男性の増加傾向が1990年代からはっきりと認められ始め、1990年代半ばから2000年代にかけて、男性が主流になっていった。フランスなぎなた連盟がフランス柔道連盟に加盟したのは1974年であるが、1979年には最初の男性がフランスなぎなた連盟に正式に登録されている。フランスなぎなた選手権大会は1984年から開催され、2008年ま

では男女混成の大会であった。以下にある表1を見れば、1990年にはじめて男性がフランスなぎなた選手権大会で優勝し、1999年からは優勝しているのは男性だけである。つまり、フランスでは、80年代に男性が登場し始めて、90年代に増加し、2000年代には男性が主流になったことがわかる。2008年以降フランスなぎなた大会において男子個人の部と女子個人の部が設定されるようになった。

1990年に東京で行われた第一回国際なぎなた親善大会では、試合競技として、男子個人、女子個人、男一人女二人から成る男女混成団体という三つのカテゴリーがあったが³⁰⁾、5年後の東京における第一回世界なぎなた選手権大会では、混成ではなく男女それぞれ三人から構成される男女別の団体試合が設けられていた³¹⁾。世界なぎなた選手権大会で、男子だけの団体が設けられたということは、この5年の間になぎなたの稽古をする男子の数が、世界的に増加していたということである。

図1を見ると、個人戦に参加した男子の増加も認められる。1992年の第二回国際なぎなた親善交流大会での男女の参加者は同数であったが、1995年の第一回世界なぎなた選手権大会の個人戦では、男子の部は女子の部より4人多い。1999年の第二回世界なぎなた選手権大会から男子人数と女子人数の差が大きくなる。

ヨーロッパなぎなた連盟は1991年に創立され、1993年には第一回ヨーロッパなぎなた大会を開

表1 フランスなぎなた大会で優勝した選手一覧 (1986-2007年)

フランスなぎなた大会		優勝者	
1986	Elicte Desbois 女	1997	Benoît Laurencon 男
1987	Nathalie Marciniowski 女	1998	Nathalie Marciniowski 女
1988	Elicte Desbois 女	1999	Benoît Laurencon 男
1989	Elicte Desbois 女	2000	Dominique Pouchard 男
1990	Alain Guillaume 男	2001	François Malagies 男
1991	Marc Duparc 男	2002	Dominique Pouchard 男
1992	Véronique Kochanski 女	2003	Dominique Pouchard 男
1993	Sabine Lacour 女	2004	Loïc Delalande 男
1994	Nathalie Marciniowski 女	2005	Loïc Delalande 男
1995	Philippe De Oliveira 男	2006	Loïc Delalande 男
1996	Sabine Lacour 女	2007	Loïc Delalande 男

フランスなぎなた連盟、『フランスなぎなた大会の結果』, 2014年, より作成

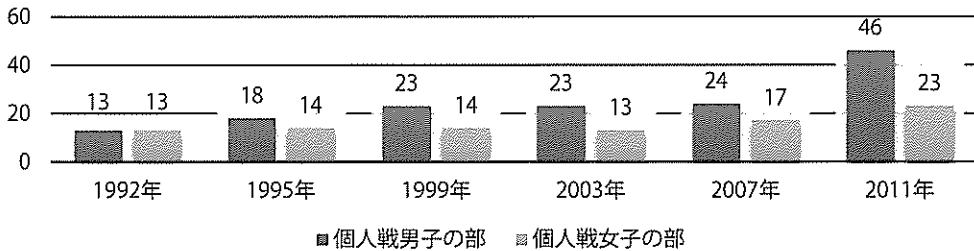


図1 国際なぎなた親善交流大会と世界なぎなた選手権大会参加者の変遷

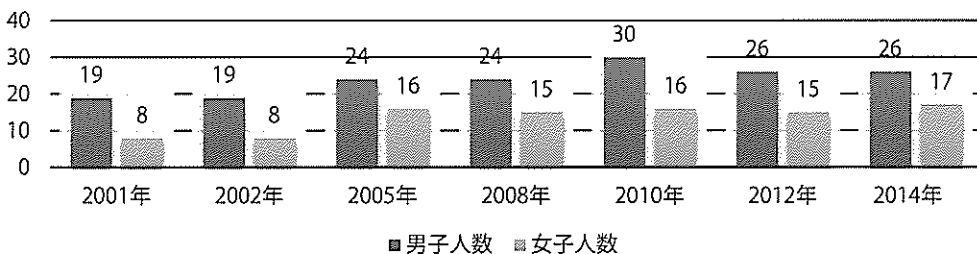


図2 ヨーロッパなぎなた大会参加者の変遷

催し、試合競技の部は団体にせよ個人にせよ混成であったが、2005年からは男子個人と女子個人の部が創設された³²⁾。ヨーロッパ大会の結果によると、1997年までの優勝者は主に女性であったが、2001年にはこの傾向が逆転している。以下にある図2は、2001年から2014年までの間に開催された全7回のヨーロッパなぎなた大会における男女人数の変遷を示している³³⁾。2005年から個人戦において男女に分かれ、女性の人数が多くなったにもかかわらず、男性人数はずっと全体の過半数を占めていることがわかる。

結局、女性は海外におけるなぎなた普及の初期においては主流にあったが、やがて形勢が逆転し、1990年代末からは男性が主流になっていった。

オランダ、ニュージーランド、オーストラリア、ドイツでは、男性のなぎなた人口が多かったのに対して、女子選手が少なかった。こうした現象に対して、国際なぎなた連盟の常任理事である木村泰子は、以下のように述べている。

平成六年にはニュージーランドで講習会・審査会が行われました。ほとんどの会員が男子で、女子中心の大会では団体戦が組めないという悩みを持つニュージーランドは、女子の

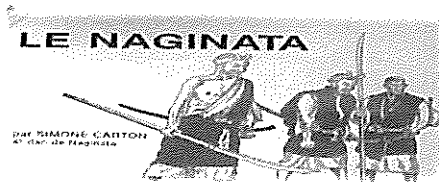
普及に努力されていました³⁴⁾。

世界なぎなた選手権大会に参加する団体を組むためには、最低三年間の稽古を受け、十分な体験を積んだ選手が三人必要であった。女子の団体出場ができないということは、結局、ニュージーランドでは男性はなぎなたを好んだが、女性はなぎなたの魅力を感じなかったことを示しているのである。

2-2 なぎなたの男性的なイメージ

女性の武道として輸出されたなぎなたであったのに、男性の人気を得た理由は、それが、武士のイメージとつながっている点にある。武器としてのなぎなたは江戸期にはすでに消失していたため、その歴史的イメージは、江戸時代の侍ではなく、中世の武士と弁慶に象徴されるような平安時代後期の僧兵に近い。シモヌ・シャルトンは、『フランスの黒帯』の中で、僧兵を描いた絵を掲載している。

シャルトンは、「この武器を用いて、五智院但馬は、矢斬りの但馬と称された」³⁵⁾ という表現を用い、武器としての薙刀の歴史を強調している。そしてこの記事の中で、武器としての薙刀について



Simone CHARTON, 《Le naginata》, *Les ceintures noires de France*, Août, n° 55, 1985, p. 10.

て以下のように述べている。

薙刀は、奈良時代末から平安時代初頭にかけて登場した。農民の兵士が農業の道具を防衛武器にしたのかもしれない。また、中国の僧の持つ矛のついた槍から着想を得たとも考えられる。あるいは、兵士が馬上で闘うために、柄の先に刀をつけたとも言われている³⁶⁾。

以上の引用の中には「兵士」(guerriers)や「戦う」(se battre)といった男性を象徴する言葉がしばしば用いられており、薙刀は女性向けの武道であるにもかかわらず、男性にふさわしい武器とされている。女性のなぎなたの稽古に関しては、「薙刀は広く親しまれたが、特に侍の妻の武器となっていくた」³⁷⁾とだけ言及されており、20世紀の女子教育における薙刀のあり方は示されていない。

欧米において、女性向けの陸上やバスケットボールの大会が20世紀半ばに開催されはじめたのに対し、武道や格闘技の大会はそれよりも遅く開催された。例えば第一回フランス女子柔道選手権大会は1974年に開催され³⁸⁾、第一回フランス女子ボクシング大会は1982年に開催されている。2000年にフランスのスポーツ省と国立スポーツ・体育研究所が行った調査によると、格闘技や武道をする女性の割合はそれぞれ22%と27%に過ぎない³⁹⁾。

なぎなたは、防具を着けて長い武器で相手を打つという活動である。海外における「防具」・「打つ」というなぎなたの特徴は、男性的なスポーツのイメージに合致したのである。女子の武道と言われても、女性らしい活動ではないので、フランスにおける女性の武道人気は低いと考えられる⁴⁰⁾。

ヨーロッパでは、歴史的に、女性向けの格闘技が存在しないため、武道も男性によって行われるものとして認識されたのである⁴¹⁾。そこには、格闘技や武道が昔から女性の体に合わないと考えられていたという理由がある。つまり、なぎなたはフランスでは基本的に男性的な活動として認められているのである。

次頁の表2からは、国によって世界なぎなた選手権大会に参加した男女の人数に相違があることがわかる。日本・ブラジル・アメリカは女性のほうが多い。ヨーロッパでは、80年代からフランスを通じて各国の連盟が創立されたので、連盟は男性が主流である。ブラジル・アメリカでは、なぎなたをする人は特に日本人と日系人が多いので、日本の女子武道のイメージを通じて輸入され、結果的に女性が多い。その反面、フランスのように、なぎなたが武士の武器というイメージを通じて普及した国においては男性のほうが多い。

3 外国人の男性愛好者に対する 全日本なぎなた連盟の対応

3-1 全日本なぎなた連盟の日本人男性に対するなぎなたの奨励

なぎなたは日本の伝統的な活動であるため、なぎなたをするということは日本の文化的アイデンティティを確固たるものにすることと同じである。そのため、外国人がなぎなたに日本の伝統武道としての価値を求めても、国際なぎなた連盟の創設と国際発展の奨励を通して、武道の本質を失う可能性があることは全日本なぎなた連盟にとって不安材料の一つである⁴²⁾。武道が海外に普及すると、受容国の文化に応じて、日本とは異なった進化をとげる。例えば柔道の場合、オリンピックに代表される国際的なJUDOが、日本で行われる柔道とは異なるという観点から、その国際的な普及を批判する声がしばしば聞かれる⁴³⁾。

日本とは異なった進化を避けるために、全日本なぎなた連盟は国際なぎなた連盟に対して監視の義務がある。木村泰子は、『創立四十周年記念誌——この10年のあゆみ——』という著書の中で、「国際なぎなた連盟の中の日本ではありますが、

表2 世界なぎなた選手権大会における各国ごとの参加者数⁴⁴⁾

(女子の方が多い時のみ太字で記す。)

		1995 年	1999 年	2003 年	2007 年	2011 年
日本	男子人数	5	4	4	4	6
	女子人数	14	10	9	7	12
アメリカ	男子人数	4	6	8	5	5
	女子人数	7	6	6	7	8
フランス	男子人数	3	3	4	7	0 ⁴⁵⁾
	女子人数	5	6	3	3	0
オランダ	男子人数	3	3	3	3	4
	女子人数	1	0	1	0	1
ニュージーランド	男子人数	3	3	2	1	3
	女子人数	0	1	0	1	2
ベルギー	男子人数	3	6	5	7	5
	女子人数	2	3	3	5	3
スウェーデン	男子人数	0	3	1	3	2
	女子人数	1	2	1	2	3
ブラジル	男子人数	1	0	2	2	0
	女子人数	4	1	0	3	3
オーストラリア	男子人数		2	2	2	4
	女子人数		0	0	0	4
チェコ共和国	男子人数			2	1	4
	女子人数			1	1	1
カナダ	男子人数				2	4
	女子人数				2	3
ドイツ	男子人数				3	3
	女子人数				3	0
イギリス	男子人数					2
	女子人数					1

各年の『世界なぎなた選手権大会プログラム』より作成

リーダー国として正しく「なぎなた」が普及・発展する」と述べている⁴⁶⁾。

すでに述べたように、日本においてなぎなたが長らく女性向けの武道として認知されてきた。日本においては、なぎなたの稽古をしていた人はもっぱら女性である。海外のなぎなたにおいて、女性ではなく男性の方が主になった。男性中心のなぎなたは日本で行われるなぎなたとは異なるため、全日本なぎなた連盟がその国際的な普及を批判することは当然であると思われる。しかし、海外の男性に高まりつつあるなぎなたの人気に対して、全日本なぎなた連盟は国内でも男性へのなぎなたの普及に努めることを決めた。

『日本の武道 —— 日本武道協議会設立 30 周年記 ——』は、全日本男子なぎなた選手権の開催の理由を以下のように述べている。

全日本男子なぎなた選手権大会：海外では、なぎなた愛好者の過半数が男子であることに鑑み、今後の海外普及も視野に入れて、平成十三年（二〇〇一）に第一回全日本男子なぎなた選手権大会を実施しました。これより、男子の普及発展にも力を注ぐようになりました⁴⁷⁾。

この文章からは、日本における男性へのなぎなたの普及が自発的な現象ではなく、海外へなぎなたを普及させたいという、全日本なぎなた連盟の願望の結果であったことを指摘できる。海外での状況に応じて、全日本なぎなた連盟が日本人男性になぎなたを奨励することを決めた結果、2001年には第一回全日本男子なぎなた選手権大会が行われた。

こうした一連の背景には、海外におけるなぎなた観が日本の武士や僧兵の武器としてのなぎなたの歴史と一致するという考えが存在している。『日本の武道——日本武道協議会設立30周年記——』は以下のように男子なぎなたの正当性を述べている。

第一回世界大会選手権大会を平成七年（一九九五）に開催したとき、海外では男子選手が女子より多かったことに驚きました。しかし、我が国の歴史を振り返ってみれば、何ら不思議はありません。もともと武器としての薙刀は男子のものでした。その後の歴史の変遷の中で、女子の武道として発展・普及してきたものだからです。この年を契機に男子の普及から、環境整備により一層配慮しています。研修会では、求めているものと、伝えたいものをより明確にし、実の上がる計画を立てるよう、留意・徹底しています⁴⁹¹。

この引用は、海外におけるなぎなたの普及に対する全日本なぎなた連盟の立場を明らかにしている。海外で男性になぎなたが人気になることは予想されていなかったものの、なぎなたはもともと武士の武器であるため、全日本なぎなた連盟にとってなぎなたの稽古をする男性の存在は結局のところ、本来の伝統に回帰することを意味していたのである。

3-2 本来の伝統に回帰する男性のなぎなた

このように、全日本なぎなた連盟は、なぎなたが国際発展によって男性に普及していくことに応じて、日本でも男性になぎなたを奨励するようになった。それが伝統回帰的な現象であると示すことによって日本の活動とすることに決めたのである。同書はまた、今後なぎなたは男女混成の活動となることを強調している。

現在のなぎなたにおいては、女子だけでなく男子もなぎなたの公式試合に出場できるようになり、“女子のみの武道”ではなくなりました。なぎなたの原点に立ち返れば、その発祥

は戦場であり、男子が用いていた武器でした⁴⁹¹。

つまり、全日本なぎなた連盟はなぎなたを「女子のみの武道」ではないものとし、なぎなたが女子のものであるという特徴を変化させることに決めたのである。なぎなたの稽古をする男性は国際化の影響によって生じたにもかかわらず、それを日本の歴史と関連させることで、なぎなたの「日本性」⁵⁰¹の価値を減少させることはなかったといえるだろう。日本のこうした立場は、「伝統」の概念に対する柔軟さのあかしであり、なぎなたの伝統的および文化的特徴を詳細に定義しないことによって可能となるものだった。

「伝統」という言葉は、なぎなたの概念と歴史を説明する際に、なぎなたの各種資料においてしばしば用いられている。「わが国固有の文化として長い歴史と伝統のもとに培われてきたなぎなたは、日本の伝統的なものの考え方、行動の仕方を内包している運動文化といえます」⁵¹¹という文章を読むと、なぎなたは昔から存在している伝統であると思われることがわかる。だが、エリック・ホブズボウムの概念によると、「伝統」とされているものの多くは、実はごく最近、それも人工的に創り出されたのだということなる⁵²¹。女性向けの武道というなぎなたの伝統的な特徴は、古来の武器としての側面に注目することで、男性が行っても不自然ではない武道として、新たに日本の伝統文化の中に位置づけ直されたと見ることができるのである。

こうした立場は社会心理学における「認知的不協和」として分析できるだろう。「認知的不協和」というのはアメリカの心理学者レオン・フェスティンガーによって提唱された用語である。人は自身の中で矛盾する認知を同時に抱えた状態、またそのときに覚える不快感を解消するために、自身の態度や行動を変更すると考えられている⁵³¹。有名な例としてあげられるのが、イソップ物語の『きつねと葡萄』である。葡萄を取れないきつねは自分を納得させるために、葡萄が未熟であると結論する。全日本なぎなた連盟は、これと同じような心理で、なぎなたの「日本性」を強調するこ

とで、国際発展という状況に対応したと言える。なぎなたの国際発展は、女子武道として定義されたなぎなたに反する側面を含んでいたにもかかわらず、全日本なぎなた連盟は現代の状況に適応するために、なぎなたの稽古をする男性に合致する正当な理由を見つけ、この現象を合理化したのである。こうした不協和は、日本が武道の伝統的側面と「日本的」特徴を保ちながら、海外への武道の普及を奨励したことに関係している。

全日本なぎなた連盟がなぎなたの稽古をする男性に反対していれば、海外におけるなぎなたの変化をコントロールできなくなり、「非日本」のなぎなたが作られたかもしれない。連盟はなぎなたの国際発展をコントロールし、「日本性」を保つために、武道における「伝統」の特徴を変えていったのである。さらに、統率国としての日本の面目を保つ方法として、世界なぎなた選手権での勝利を確固たるものとするのが求められており、そのこともまた、日本における男性へのなぎなた普及を奨励することに影響を及ぼしている。世界なぎなた選手権に参加する外国人男子選手の数が増加したことに対して、全日本なぎなた連盟は、「すでに、世界選手権大会で男子の種目が実施されている現状に鑑み、男子選手権を二十一世紀初めの年である平成十三年にスタートさせることになりました」⁵⁴と述べ、日本でも男性になぎなたを奨励することを決めた。

武道は日本発祥のものであるから、世界大会での日本の優勝は当然のことのように思われている。日本チームの優勝を確保するために、海外でのなぎなたを行う男性の増加に対して、日本も男性へのなぎなたの普及に努力することが必要である。このように、全日本なぎなた連盟にとっては、なぎなたの原則を固持して女性の武道という伝統を保つことより、柔軟性をもってなぎなたの国際化への議論をすすめる方が重要であったと指摘することができる。

おわりに

本稿は、女子武道であるなぎなたが海外においてはどのようにして男性に人気があるのかという問題に

ついて、日本と海外におけるなぎなたのイメージを分析して明示した。また、全日本なぎなた連盟が男性なぎなたという現象に対してどのように対応したかを明らかにすることを試みた。

日本におけるなぎなたの一般的なイメージでは、中世の女性武士と薙刀が結びついているため、薙刀は日本の女子教育に適した科目として認められていた。明治・大正・昭和時代を通して女子体育として発展するとともに、なぎなたは女性の身体向けの体育の活動であることが強調されていった。つまり、なぎなたは女子向けの武道として長い歴史を持っているため、今日でも日本におけるなぎなたには女性的なイメージが存在している。したがって1960年代と1970年代に、海外においてなぎなたが普及し始めた時、その対象者は当然女性であった。

しかし海外では、1990年ころから男性がなぎなたを始め、やがて1990年代半ばから2000年代にかけて、男性が主流になっていった。海外でなぎなたは、僧兵と武士が戦場で用いた武器としてのイメージを通じて普及されたため、なぎなたの愛好者は男性のほうが圧倒的に多くなっていったのである。

全日本なぎなた連盟はこの現象に対して、反意を表明しなかった。むしろ、本来の歴史的な役割と連関させ、男性へのなぎなたの普及を奨励していった。つまり、なぎなたを国際的に普及させ、国際なぎなた連盟をコントロールするために、全日本なぎなた連盟はなぎなたの伝統的な特徴を再定義しなければならなかったのである。このように男女それぞれ異なるなぎなたのイメージを通じて、なぎなたは国際発展したということができよう。

注

- 1) 1943年3月2日の高等女学校規程によって体錬科に武道が設けられることとなり、同年3月25日の高等女学校教科教授及修練指導要目で、「体錬科武道は薙刀を課すべし但し弓道を併せ課することを得」（『近代日本教育制度史料』第3巻、講談社、1956年、131頁）とされている。
- 2) 中村民雄「近代薙刀小史」『近代なぎなた名著全集』第8巻、本の友社、2004年、23頁。
- 3) 同上。

- 4) 榎田八重子『奔流——私の生きかた』京都なぎなた連盟, 1992 年, 155-156 頁.
- 5) 国際なぎなた連盟『国際なぎなた連盟創立 20 周年記念誌』国際なぎなた連盟, 2011 年, 1 頁.
- 6) Alexander BENNETT, *Naginata: The definitive guide*, Auckland, Kendo world publication, 2005, p. 22.
- 7) 前嶋ひろみ「『薙刀(長刀)』から『なぎなた』へ」『神戸女学院大学論集』53 巻 2 号, 2006 年 12 月, 182 頁.
- 8) 1914 年に開催された全国高等女学校及び実科高等女学校長会議において、文部省から「高等女学校及び実科高等女学校の生徒に適當なる遊戯の種類如何」という諮問があり、それに対する答申で、「高等女学校及び実科高等女学校の生徒に比較的適當なりと認むる遊戯の種類」として薙刀が挙げられている(高等女学校研究会編集『高等女学校資料集成』第 5 巻, 大空社, 1989 年, 242 頁).
- 9) 1936 年 11 月 6 日に出された、高等女学校令施行規則改正と師範学校規程改正により、薙刀が正課になった。また、1937 年 3 月 1 日に文部省より出された「学校体操教授要目改正の要旨並改正の要点」『近代日本教育制度史料』第 6 巻, 講談社, 1956 年, 246 頁, も参照.
- 10) 1943 年 3 月 2 日の実業学校規程によって体操科に武道が設けられることとなる。『近代日本教育制度史料』第 3 巻, 講談社, 1956 年, 191 頁. また、1943 年 3 月 8 日の師範学校規程によって体操科に武道が設けられることとなる。『近代日本教育制度史料』第 5 巻, 講談社, 1956 年, 571 頁.
- 11) その一例として、新野久平『日本国民薙刀道教本』, 進能社, 1941 年が挙げられる.
- 12) アレキサンダー・ベネット『日本人の知らない武士道』文春新書, 2013 年, 24 頁.
- 13) 佐伯真一『戦場の精神史——武士道という幻影』NHK 出版, 2004 年, 264 頁.
- 14) 学徒体育刊行会編「薙刀——要目の精神と其の指導」(座談会), 『学徒体育』育英出版, 1944 年 6 月号, 36-37 頁.
- 15) 『近代日本教育制度史料』第 25 巻, 講談社, 1958 年, 544 頁.
- 16) 徳永千代子『私の歩んだなぎなたの道』日本武道館, 2003 年, 145 頁.
- 17) 『現代日本教育制度史料』16, 東京法令出版, 1986 年, 359 頁.
- 18) 園部繁八『図解コーチなぎなた』成美堂出版, 1981 年, 17 頁.
- 19) 日本武道館『日本の武道——日本武道協議会設立 30 周年記——』日本武道館, 2007 年, 452 頁.
- 20) 同上, 344 頁.
- 21) 徳永, 前掲書, 209 頁.
- 22) 同上, 210-211 頁.
- 23) 同上, 215 頁.
- 24) 国際なぎなた連盟, 前掲書, 72 頁.
- 25) 同上, 49 頁.
- 26) 異種試合は、ルールが異なる武道が相互に異なる武器で行なう試合である.
- 27) 天道流薙刀は古流の一つである伝道流で教えられる薙刀の形である.
- 28) 全日本なぎなた連盟『創立四十周年記念誌——この 10 年のあゆみ——』全日本なぎなた連盟, 1996 年, 195-196 頁.
- 29) Simone CHARTON, «Le naginata», *les ceintures noires de France*, Août, n 55, 1985, p. 12.
- 30) 国際なぎなた連盟, 前掲書, 86 頁.
- 31) 同上.
- 32) フランスなぎなた連盟, 第五回ヨーロッパなぎなた選手権大会プログラム, 2005 年, 3 頁.
- 33) 2008 年より前は開催時期が不定期であったが、2008 年以降は世界なぎなた選手権大会や国際なぎなたセミナーの実施状況との兼ね合いで、2 年ごとに開催されることとなった.
- 34) 全日本なぎなた連盟, 前掲書, 46 頁.
- 35) «C'est en maniant ce type de naginata que le samourai Gochin No Tajima fut surnommé Tajima le coupeur de flèche.», CHARTON, *op. cit.*, p. 10.
- 36) «Le naginata apparait pour la première fois au sortir de l'ère Heian. Il se peut que des paysans guerriers aient transformé un outil agricole en arme de défense. On peut aussi penser qu'elle fut directement inspirée par la hallebarde des moines chinois. Une autre version raconte que des guerriers pour se battre à cheval ou contre des cavaliers auraient attaché leur sabre à l'extrémité d'une hampe.», *Ibid.*
- 37) «Son usage fut réservé, sans exclusive cependant, aux femmes de samourai.», *Ibid.*, p. 11.
- 38) 魚住孝至編『グローバル時代の武道——比較文化論的考察とグローバル化に向けての課題——』国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所, 2012 年, 119 頁.
- 39) Patrick MIGNON, Guy TRUCHOT (dir.), *Les pratiques sportives en France: Résultats de l'enquête menée en 2000 par le Ministère des Sports et l'Institut National du Sport et de l'Education Physique*, Paris, Ministère des Sports, 2002, p. 77.
- 40) Pierre ARNAUD, Thierry TERRET (dir.), *Histoire du sport féminin tome 2: sport masculin-sport féminin: Education et société*, Paris, L'Harmattan, 1996, pp. 264-265.
- 41) Gertrud PFISTER, Women and sport: The role of women in traditional games and sports, *Olympic Review XXVI-31*, International Olympic committee, February march 2000 n 31, p. 40.
- 42) 日本武道館『贈る言葉——なぎなた範士からのメッセージ——』日本武道館, 150 頁.
- 43) 田中守『武道——過去・現在・未来——』日本武道館, 2005 年, 12 頁.
- 44) 空白の所は未加盟を意味している.
- 45) 福島の前原事故を受けてフランスは出場を辞退した.
- 46) 全日本なぎなた連盟, 前掲書, 46 頁.

- 47) 日本武道館, 前掲書『日本の武道 —— 日本武道協議会設立 30 周年記 ——』, 336 頁.
- 48) 同上, 360 頁.
- 49) 同上, 344 頁.
- 50) フィリップ・ペルティエ (Philippe PELLETIER) は、『日本 —— もう一つの現代性の危機 (Japon : Crise d'une autre modernité)』の中で、日本の文化的なアイデンティティを意味している「日本性」(japonité)という言葉が登場させたが、この言葉は日本アイデンティティや「日本の固有性」を意味する.
- 51) 日本武道館, 前掲書『日本の武道 —— 日本武道協議会設立 30 周年記 ——』, 341 頁.
- 52) Eric HOBSBAWM, Terence RANGER, *The invention of tradition*, Cambridge, Cambridge University Press, 1983, p. 15.
- 53) Leon FEISTINGER, (dir.), *L'échec d'une prophétie*, Paris, PUF, 1993, p. 24.
- 54) 日本武道館, 前掲書『贈る言葉 —— なぎなた範士からのメッセージ ——』, 78 頁.

参考文献

一次史料

- 学徒体育刊行会編『薙刀 —— 要目の精神と其の指導』(座談会)『学徒体育』育英出版 1944 年 6 月号, 31-48 頁
- 近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第 3 巻, 講談社, 1956 年
- 近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第 5 巻, 講談社, 1956 年
- 近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第 6 巻, 講談社, 1956 年
- 近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第 25 巻, 講談社, 1958 年
- 現代日本教育制度史料編集委員会編『現代日本教育制度史料』16, 東京法令出版, 1986 年
- 高等女学校研究会編集『高等女学校資料集成』第 5 巻, 大空社, 1989 年
- 新野久平『日本国民薙刀道教本』進能社, 1941 年
- 園部繁八『図解コーチなぎなた』成美堂出版, 1971 年
- 全日本なぎなた連盟『創立四十周年記念誌 —— この 10 年のあゆみ ——』全日本なぎなた連盟, 1996 年
- 徳永千代子『私の歩んだなぎなたの道』日本武道館, 2003 年
- 日本武道館『日本の武道 —— 日本武道協議会設立 30 周年記 ——』日本武道館, 2007 年
- 日本武道館『贈る言葉 —— なぎなた範士からのメッセージ ——』日本武道館, 2007 年
- 文部省「実施可能学校に“なぎなた”を —— なぎなた実施で通知」『時事通信内外教育版』第 1107 号, 1960 年 1 月 19 日
- Simone CHARTON, «Le naginata», *les ceintures noires de France*, Août, n 55, 1985, p. 10-12.
- フランスなぎなた連盟, 『フランスなぎなた大会の結

果』, 2014 年

国際なぎなた親善交流大会

フランスなぎなた連盟, 『第二回国際なぎなた親善交流大会プログラム』, 1992 年

世界なぎなた選手権大会

全日本なぎなた連盟, 『第一回世界なぎなた選手権大会プログラム』, 1995 年

フランスなぎなた連盟, 『第二回世界なぎなた選手権大会プログラム』, 1999 年

アメリカなぎなた連盟, 『第三回世界なぎなた選手権大会プログラム』, 2003 年

ベルギーなぎなた連盟, 『第四回世界なぎなた選手権大会プログラム』, 2007 年

全日本なぎなた連盟, 『第五回世界なぎなた選手権大会プログラム』, 2011 年

ヨーロッパなぎなた選手権大会

ベルギーなぎなた連盟, 『第三回ヨーロッパなぎなた選手権大会プログラム』, 2001 年

フランスなぎなた連盟, 『第四回ヨーロッパなぎなた選手権大会プログラム』, 2002 年

フランスなぎなた連盟, 『第五回ヨーロッパなぎなた選手権大会プログラム』, 2005 年

オランダなぎなた連盟, 『第六回ヨーロッパなぎなた選手権大会プログラム』, 2008 年

ドイツなぎなた連盟, 『第七回ヨーロッパなぎなた選手権大会プログラム』, 2010 年

チェコなぎなた連盟, 『第八回ヨーロッパなぎなた選手権大会プログラム』, 2012 年

イギリスなぎなた連盟, 『第九回ヨーロッパなぎなた選手権大会プログラム』, 2014 年

参考文献

- 魚住孝至編『グローバル時代の武道 —— 比較文化論的考察とグローバル化に向けての課題 ——』国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所, 2012 年
- 国際なぎなた連盟『国際なぎなた連盟創立 20 周年記念誌』国際なぎなた連盟, 2011 年
- 佐伯真一『戦場の精神史 —— 武士道という幻影』NHK 出版, 2004 年
- 榎田八重子『奔流 —— 私の生きかた』京都なぎなた連盟, 1992 年
- 田中守『武道 —— 過去・現在・未来 ——』日本武道館, 2005 年
- 玉置捷子編『全日本なぎなた連盟 50 年史』全日本なぎなた連盟, 2006 年
- 谷口雅子『スポーツする身体とジェンダー』青弓社, 2007 年
- 中村民雄『近代薙刀小史』『近代なぎなた名著全集』第 8 巻, 本の友社, 2004 年
- 福田啓子『近・現代薙刀 (なぎなた) 史 —— 先駆者による女子教育への功績を基軸として ——』新踏社, 2009 年
- 前嶋ひろみ『薙刀 (長刀) から「なぎなた」へ』『神戸女学院大学論集』53 巻 2 号, 2006 年 12 月, 175-194 頁

- Pierre ARNAUD, Thierry TERRET (dir.), *Histoire du sport féminin tome 2 : sport masculin-sport féminin : Education et société*, Paris, L'Harmattan, 1996.
- Alexander BENNETT, *Naginata : The definitive guide*, Auckland, Kendo world publication, 2005.
- Leon FEISTINGER (dir.), *L'échec d'une prophétie*, Paris, PUF, 1993.
- Patrick MIGNON, Guy TRUCHOT (dir.), *Les pratiques sportives en France : Résultats de l'enquête menée en 2000 par le Ministère des Sports et l'Institut National du Sport et de l'Education Physique*, Paris, Ministère des Sports, 2002.
- Eric HOBSBAWM, Terence RANGER, *The invention of tradition*, Cambridge, Cambridge University Press, 1983.
- Philippe PELLETIER, *Japon : Crise d'une autre modernité*, Paris, Edition Belin—La Documentation française, 2003.
- Gertrud PFISTER, Women and sport : The role of women in traditional games and sports, Olympic, *Review XXVI-31*, International Olympic committee, February–March, n 31, 2000, pp. 38–45.

Le genre du naginata et son développement international

Chloé BELLEC

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Résumé Le terme naginata fait référence à plusieurs éléments : c'est tout d'abord le nom d'une arme, constituée d'une longue hampe associée à une lame légèrement courbe. Cette arme fut utilisée sur les champs de bataille entre le IX^{ème} siècle et le XV^{ème} siècle. Le mot naginata est aussi employé pour nommer l'activité : «faire du naginata» qui consiste en l'apprentissage de techniques utilisant un naginata. A partir du début du XX^{ème} siècle, cette discipline commence à être enseignée dans les écoles. Plusieurs professeurs de naginata, formés pendant la Seconde Guerre mondiale, décident de faire réintégrer cet art martial en tant qu'activité scolaire, créant ainsi le «naginata» en 1955. En 1990 la Fédération Internationale de Naginata est créée et en 2007 le quatrième championnat du monde réunissait 13 pays.

Le naginata est connu comme un art martial japonais destiné aux femmes et aux jeunes filles ; pourtant, en dehors du Japon, ce sont majoritairement des hommes qui le pratiquent. Pourquoi le naginata est-il défini comme un art martial féminin au Japon et quels sont les éléments qui ont amenés les hommes vers la pratique du naginata à l'étranger ? Le caractère féminin du naginata est considéré comme un trait traditionnel au Japon, sa popularité actuelle à l'étranger chez les hommes permet donc de soulever plusieurs questions sur les positions de la Fédération Japonaise de Naginata face à ce phénomène.